

学習指導案（高校国語科・古典探究）

授業者：
指導教諭：

- 1 対象
- 2 日時 2024年6月6日5限 13:30～14:20
- 3 場所
- 4 単元名 枕草子「二月つごもりごろに」『高校 精選古典探究』（第一学習社）
- 5 単元について

(1) 単元の目標

- ・作品に用いられている語句の意味や、文の構造を理解する。（知識及び技能）
- ・作者の感情について展開に即して的確にとらえることができる。（思考力・判断力・表現力等）
- ・作品から現代との共通点や相違点を見つけ、古典への関心を高める。（学びに向かう力・人間性等）

(2) 教材観

本教材は、既習である「春はあけぼの」に代表される『枕草子』の作者清少納言が宮中に出仕していたところを回想する章段である。公任から送られる下の句に対してどのように上の句をつけて返すべきか悩みつつも、自前の教養と機転を利かせて返答し、高い評価を得たということが中心となっている。また、歌のやり取りとそれに対し高い評価を得たことを記録にのこした清少納言の人柄についても考えることのできる教材である。

(3) 生徒観

古典への苦手意識が大きく、古典に関する基礎知識や古典単語の語彙が少なく、用言や助動詞の定着が不十分な生徒が多い。知識の少なさゆえに古典を理解することが困難であるため、興味を持つことができない生徒が多いが、当時の人々も現代に生きる私たちと似たような感覚を持っていたということを実感することにより、学習に前向きに取り組むことができる。

(4) 指導観

古典への苦手意識を取り除くために古典常識や文法などの基礎から丁寧に復習を行い、知識を少しずつ定着させることで古典世界に興味を持たせて、口語訳ができるようになること。また、作品の解釈ができるようになることを目指す。古典世界を身近なものに感じさせるために、適宜現代での例を挙げ、当時の感覚を感じられるよう指導する。内容に関しては公任が送った下の句に対する清少納言がつけた上の句の卓越性を鑑賞させたい。

6 単元の評価規準

A 知識及び技能	思考力・判断力・表現力等			E 学びに向かう人間性
	B 聞くこと・話すこと	C 書くこと	D 読むこと	

古典常識について理解している。 本文の読解にかかわる文法事項や設定を理解している。 用言・助動詞の品詞分解ができる。			作品の内容を解釈し、展開に即して作者の心情について考えることができる。	古典への関心を高め、宮中の生活や歌のやり取りについて興味を持ち、考えを深めようとしている。
---	--	--	--	--

7 単元の計画（総時間 6時間）

※単元の目標を達成するために指導計画を示す。

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準
一	1	枕草子の概要を復習する。 本文の音読を行う。 本文をノートに書き写し、授業ノートを作成する。	Kahoot!を用いて全員が復習に参加できるようにする。 歴史的仮名遣いや古文単語の読み方を間違っていないか机間指導を行う。 時間内に終わらなければ次回授業までの課題とする。	積極的に活動に参加している。(E) 正しく音読できている。(A)(E) 積極的に取り組んでいる。(E)
二	2	冒頭から「少し春ある心地こそすれとあるは、」までの読解を行う。 用言・助動詞の品詞分解と口語訳を行う。	歌が送られてきた日の気候を確認する。また、公任の歌は白氏文集をふまえた表現がされていることを説明する。 板書を用いて確認する。適宜部分訳を提示し、生徒自身で文章として訳せるようにする。	作品内の季節と気候を理解し歌のやり取りの卓越性を理解する土台とする。(A) 品詞分解ができる。(A) 内容を理解し、口語訳ができる。(D)
	3	【本事案参照】		
	4	前回の復習を行う。 「空寒み花にまがえて散る雪にと、」までの読解を行う。	Kahoot!を用いて全員が復習に参加できるようにする。 作者の緊張や不安が感じられるポイントである。なぜ焦りがあるのか生徒に考えさ	積極的に活動に参加している。(E) 作者の心情について考え解釈できる。(D)

			せて解説する。	
			作者が公任に送った下の句 に対してつけた上の句には どのような要素が詰め込ま れていて、どこが卓越してい るのか解説する。	歌の技巧性について理 解できる。(A)
		用言・助動詞の品詞分解と口語訳 を行う。	板書を用いて確認する。適宜 部分訳を提示し、生徒自身で 文章として訳せるようにす る。	品詞分解ができる。(A) 内容を理解し、口語訳が できる。(D)
	5	前回の復習を行う。	Kahoot!を用いて全員が復習 に参加できるようにする。	積極的に活動に参加して いる。(E)
		「わななくわななく」から最後ま での読解を行う。	作者がつけた上の句への評 価はどのようなものであっ たのか考えさせる。内侍とは 当時どういった立ち位置で あったのか説明を行う。	後宮の役職について理 解し、作者の歌がどのよ うに評価されたか考え ることができる。(A)(D)
		用言・助動詞の品詞分解と口語訳 を行う。	板書を用いて確認する。適宜 部分訳を提示し、生徒自身で 文章として訳せるようにす る。	品詞分解ができる。(A) 内容を理解し、口語訳が できる。(D)
三	6	前回の復習を行う。	Kahoot!を用いて全員が復習 に参加できるようにする。	積極的に活動に参加して いる。(E)
		ワークシートを用い、どういった 点で作者の歌は評価されたのか、 展開ごとの作者の心情をまとめ、 全体を理解する。	解釈に必要なメモと口語訳 を記入した授業ノートを基 に、ワークシートに取り組ま せる。机間指導を行ったうえ で、一人での作業が難しそ うであれば、3, 4人のグルー プで解釈の確認をさせつつ取 り組ませる。	作品の解釈が適切にで きている。(D) 自分の考えを持ち積極 的に取り組んでいる。 (E)

8 本事案（第二次 第3時）

(1) 本時の目標

- ・天候と一致しない公任の歌に対して清少納言が「今日のけしきにいとよう合ひたるを」と考えた理由について理解できる。
- ・歌の返事について悩む清少納言の心情について考え、理解する。

(2) 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 7分	Kahoot!を用いて前回授業の復習と、本時の内容である歌についての問題で本文の理解につなげる。	スムーズに進められるよう心掛ける。 有名な百人一首の歌を例に挙げ、上の句と下の句のつながりを意識させた問題を取り入れる。	積極的に取り組んでいる。 (E)
展開 35分	なぜ作者が当日の天気になぜ合わない歌に対してよく合っていると考えたのか理解させる。 作者が返答に躊躇した理由を考えさせる。 用言・助動詞の品詞分解と口語訳を行う。	前回の白氏文集をふまえた公任の歌から、作者にも白氏文集に対する共通理解があったことを名探偵コナンの「見た目は子供、頭脳は大人」というフレーズを例に解説を行う。 なぜ作者が返答に躊躇したのか根拠となる部分を抜き出させる。 板書を用いて確認する。適宜部分訳を提示し、生徒自身で文章として訳せるようにする。	当時の教養層の知識について理解する。(A) 現代の例を挙げ、作者がどのような感覚であったか考え、興味を持つことができる。 (E) 古文単語の知識を用いて、内容を正しく解釈できる。 (A) (D) 品詞分解ができる。(A) 内容を理解し、口語訳ができる。(D)
まとめ 3分	本時の振り返りを行う。 次回予告を行う。	本時での学習をまとめ、整理する。	

二月つごもりごろに

二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪少しうち散りたるほど、黒戸に主殿寮来て、「かうて候ふ。」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の。」とてあるを見れば、懐紙に、

少し春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日のけしきにいとよう合ひたるを、これが本はいかでか付くべからむと、思ひわづらひぬ。「たれたれか。」と問へば、「それぞれ。」と言ふ。みないとはづかしき中に、宰相の御いらへを、いかでかことなしびに言ひ出でむと、心一つに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれど、上のおはしまして大殿籠りたり。主殿寮は、「とく、とく。」と言ふ。げに、おそうさへあらむは、いととりどころなければ、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。

これがことを聞かばやと思ふに、もしられたらば聞かじとおぼゆるを、¹⁰俊賢の宰相など、「なほ内侍に奏してなきむ。」となむ、定め給ひし。」とばかり

ぞ、左兵衛督の中將におはせし、語り給ひし。

(第百二段)

学習の手引き

一 公任の手紙を受け取ってから返事をするまでの作者の心情を、場面の展開を追いながらまとめてみよう。

二 作者の返事について

1 公任から出されたお題(下の句)のもととなった白居易の詩句(脚注5)と比べながら、作者が返した上の句を評価してみよう。

2 公任たちの評価はどのようなものであったのか、根拠となる言葉を示しながら、説明してみよう。

随筆(二) 枕草子

言葉の手引き

一 次の古語の意味を調べよう。

元1 思ひわづらふ 2 はづかし 3 いらへ 7

4 大殿籠る 5 とりどころ 10

6 さはれ 10 7 まがふ 11 8 わななく 12

9 わびし 12 10 そしる 13 11 奏す 14

二 「おそうさへあらむは、いととりどころなければ、」(元・9)を、「さへ」によって何に何を添加しているかがわかるように口語訳しよう。

1 黒戸 清涼殿の北廊の部屋。黒戸

御所。↓口絵「清涼殿図」

2 主殿寮 主殿寮の役人。宮中の清掃などをつかさどる。

3 かうて候ふ 挨拶の言葉。今の「こめんください」に当たる。

4 公任の宰相 藤原公任(公六-1040)

二「宰相」は参議の唐名。九九二年(正暦三)から一〇〇一年(長保三)まで参議を務めた。当時の歌壇の第一人者。

5 少し春ある 白居易の詩「三時寒

冷 多飛雪、二月山寒、少春有。

春。」(白氏文集)卷十四・南秦雪の二節をふまえた表現。

6 たれたれか 誰かがいらつしやるのか。

7 ことなしびに なんでもないふう

に。

8 御前 中宮定子(公六-1000)。

9 上 一条天皇(公六-1023、在位

公六-1031)。

10 俊賢の宰相 源俊賢(公六-1035、九九五年(長徳元)から一〇〇四

年(寛弘元)まで参議。

11 内侍 掌侍の略称。内侍司の女官で、尚侍、典侍に次ぐ三等官。

内侍司は、天皇に近侍する要職で、後宮の中でも最高位に置かれる役所。

12 左兵衛督の中將におはせし 左兵衛督で当時近衛中將でいらした人。

藤原実成(公五-1040) 九九八年に右近衛權中將のこととされるが、左兵衛督任官は、この話よりも後の一〇〇九年(寛弘元)。

50